

# 令和7年度 第2回 四街道市文化財審議会 会議次第

日 時 令和8年2月26日（木）

午前10時00分～

会 場 四街道市役所第二庁舎

第二会議室

1 開会

2 議題

1) 物井1号墳石棺出土資料の指定申請について

(諮問・答申)

2) 市指定文化財候補資料の指定理由書（案）の確認について

(南作遺跡出土の墨書土器資料群)

3) その他

3 閉会

指定理由書（案）

## 【案】

物井 1 号墳（清水遺跡 S11 号墳）石棺内出土遺物

- (1) 名称 物井 1 号墳（清水遺跡 S11 号墳）石棺内出土遺物
- (2) 員数 一括
- (3) 所在地 四街道市鹿渡 2001-10（四街道市教育委員会）
- (4) 所有者 四街道市
- (5) 種別 有形文化財（考古資料）
- (6) 適用指定基準 古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- (7) 時代・年代 古墳時代後期（6 世紀末葉～7 世紀初頭）  
石棺 : II 類（II a 類）（6 世紀末～7 世紀中葉）  
装飾大刀 : 7 世紀第 1 四半期頃  
須恵器 : TK43～TK209（6 世紀末葉～7 世紀初頭）
- (8) 概要 物井 1 号墳石棺内出土遺物は、四街道市物井字清水に所在する清水遺跡において、昭和56（1981）年に四街道市教育委員会による調査で出土した副葬品である。直径約25mの円墳の箱式石棺（筑波山産板石組）内から出土し、金属製品14点（金銅装圭頭大刀1振、直刀5振、鉄鏃6点、鉄環2点）と玉類5点（琥珀玉5点）が、保存されていた。また、石棺内等から須恵器が29点出土している。南寄りの墳裾から検出された石棺内にはおびただしい人骨が遺存し、個体数・性別・年齢などが特定されないものの、最も多い個体数を確認した左大腿骨の鑑定結果では、男性5・女性3・不明3の合計11体という結果であった。
- 特筆される遺物は、石棺内で出土した圭頭大刀であり、把頭金具、鏝、鏝縁金具、把間金具、鉄刀本体で構成される。把頭金具は金銅製で、一部を欠損するが、全体像が判別できる。また、木芯部分が残存し、表面に黒漆が塗られ、鳩目金具1点が打ち込まれている。鏝は銅製で、窓のない小型の板鏝である。鏝縁金具は金銅製で、大きさが鏝の内径と一致し、同一個体と考えられる。把間金具は金銅製の筒状品で、2片に分かれている。繊細な列点によって蕨手文を表現する。木芯は残っていない。鉄刀本体は切先を欠き、刀身と茎の2片に分かれている。刀身に金銅製のハバ

【案】

キが残存する。茎には目釘が1カ所確認される。刀身には木質が認められず、鞘装具も出土していないことから、抜身で副葬された可能性が考えられる。把頭の形態から、大刀の年代は7世紀第1四半期頃に位置づけられる。物井1号墳出土圭頭大刀は表面に鍍金を施す装飾付大刀の一種で、大和政権から古墳の被葬者に下賜されたものと考えられる。古代における物井地域と大和政権の関わりを示す遺物として、重要な意義をもつ。

(9) 保存上の留意事項 温湿度管理が可能な収蔵庫での保存が望ましい。

(10) 参考事項 別紙参照

(11) その他 鉄鏃及び直刀の一部は摩耗のため、判別不可

別紙：参考資料

### ①物井古墳群の範囲

四街道市北東部に位置する物井周辺では、物井地区・内黒田地区の土地区画整理事業及び千代田団地の造成に伴い、旧石器時代から近世に至る数多くの遺跡が発掘調査され、多くの古墳も確認されている。

物井古墳群の範囲については定まっていないのが現状である。物井地区の調査によって発見された古墳群及び千代田古墳群や内黒田地区の池花古墳群を広く一体の古墳群として捉える考え方（渡邊 2003）、物井地区の清水遺跡・出口遺跡（出口・鐘塚遺跡含む）・新久遺跡に分布する古墳群を物井古墳群、御山遺跡で確認された古墳群を御山古墳群とする考え方（沼澤 2009）があるが、現在千葉県教育委員会で公開されている「ふさの国ナビゲーション」では後者の範囲を物井古墳群としている。ここでは、後者を物井古墳群として扱う。

### ②物井古墳群の変遷

6世紀中葉頃から7世紀前葉頃までの比較的短期間に多くの古墳が築造され、その後しばらく、追葬や追善祭祀が行われている。

### ③物井古墳群における古墳の数

清水遺跡・出口遺跡（出口・鐘塚古墳含む）・新久遺跡から検出された古墳は総数 39 基で、調査により墳形が分かった古墳の内訳は、前方後円墳 3 基、帆立貝形古墳 11 基、円墳 15 基の合計 29 基で、以外の 10 基は未調査あるいは一部の調査のみで墳形が判断できないものである。なお、出口遺跡内に所在する D08・D09 号墳は物井古墳広場として現状保存されている。

### ④物井 1 号墳（清水遺跡 S11 号墳）の調査履歴（第 2-1、2、3 図）

- ・昭和 56 年 物井古墳発掘調査会（本調査） 主体部及び周溝の一部を検出
- ・平成 11 年 千葉県教育振興財団（本調査） 周溝の一部を検出
- ・令和 05 年 四街道市教育委員会（確認調査） 周溝の一部を検出

※昭和 56 年に調査された際は物井 1 号墳と呼称されたが、その後、物井地区土地区画整理事業に伴い千葉県教育振興財団によって行われた発掘調査で、清水遺跡 S11 号墳として修正された。

### 物井古墳群と物井 1 号墳の位置づけ

沼澤氏は、全国的な古墳の集成・検討から、直径 30 歩（41.1m）以下の中小規模の古墳の大きさは、3 歩（4.11m）きざみに微調整された築造規格が存在していたことを明らかにし、地方の中小古墳の築造に際して、旧来の倭政権の統制が影響していた可能性を指摘している。

沼澤氏の物井古墳群の分析によると、墳丘直径のランクとして、A：18 歩（24.7m）、B：

15 歩（20.6m）、C：12 歩（16.4m）、D：9 歩（12.3m）の 4 つの階層が示されている。大きさの分かる 29 基の古墳の内訳は、A：7 基、B：14 基、C：4 基、D：4 基となり、物井 1 号墳は A ランクに属する。周辺の古墳群の中で A ランクの古墳は、千代田古墳群で 1 基、御山古墳群で 1 基のみであり、物井古墳群の優位性が表れている。ちなみに、御山遺跡の A ランクの古墳は、令和 4 年度に県の有形文化財（考古資料）に指定された金銅装大刀（指定では円頭、豊島氏は圭頭）を出土した古墳で、御山 1 号墳との関係が注目される。

物井古墳群の埋葬施設には、箱式石棺、木棺、周溝内土坑などがあるが、箱式石棺を採用した古墳は 13 基で、ランクごとの内訳は、A：7 基、B：4 基、C：2 基で、D ランクにはない。このことは、物井古墳群の階層の高い古墳に箱式石棺が採用されていることを示している。後述するように、この箱式石棺の石材として、「筑波石」と呼ばれる筑波変成岩（絹雲母片岩）が使われている。この石材は香取海を隔てた筑波山周辺から運ばれてきたものであり、香取海・鹿島川を利用した水上交通が必須となる。石材入手のネットワークや水上交通の掌握など、箱式石棺を埋葬施設とした古墳の被葬者の物井地域内での優位性が看守される。

#### ⑥常総地域の中の物井古墳群（第 4 図）

常総地域とは、茨城県南部と千葉県北部一帯を指す。かつて広大な内海（別名、香取海）があり、現在でも日本で二番目の面積をもつ湖である霞ヶ浦を挟んで隣接している。古代の令制国では常陸国と下総国にあたる。古墳時代後・終末期の常総地域は、7 世紀代に至っても前方後円墳の築造が継続され、埋葬施設が墳裾に位置する古墳が主体となることや、同一の埋葬施設を持つことなど、強い地域性が指摘されている。近年の研究では、埋葬施設の種類と墳丘に対する位置関係は、埋葬景観の共通性を示しながら、階層差を表現していることが明らかとされている（富田 2021）。物井古墳群は、そういった階層構造中で、最も下位の第 3 ランクに位置づけられる。

#### ⑦石棺の材質と想定石材運搬経路（第 5-1、2 図）

物井 1 号墳（清水遺跡 S11 号墳）を含め、物井古墳群内の一部の古墳では、いわゆる「筑波石」とされる筑波変成岩を使用した埋葬施設である箱式石棺が採用されている。この箱式石棺は、常総地域の下位層で非常に多く採用されている。石材の流通には水上交通が想定されており、近年の研究により、その想定石材運搬経路が復元されている（浅野 2023）。物井古墳群内で使用された筑波変成岩も香取海、印旛沼、鹿島川といった流路でもたらされたと考えられる。

#### ⑧箱式石棺の年代と物井 1 号墳について（第 6 図）

箱式石棺は、Ⅰ型式、Ⅱ型式（富田はⅡa 類・Ⅱb 類と標記）、Ⅲ型式、Ⅳ型式の概ね 4 型式に分類されている（石橋 1995、富田 2021）。物井 1 号墳はⅡ型式（石橋 1995）もしくはⅡa 類（富田 2021）に位置づけられている。なお、同じく圭頭大刀（装飾大刀）が出土した御山 SX-15 墳は、Ⅲ類（石橋 1995）もしくはⅡb 類（富田 2021）に位置づけられている。Ⅱ類（Ⅱa 類）の出現はⅢ類（Ⅱb 類）に先行するものの、一時期併存している。歴年代と

しては、Ⅱ類（Ⅱa類）は6世紀末葉～7世紀中葉、Ⅲ類（Ⅱb類）は7世紀中葉以降の年代が与えられている（石橋 1995、冨田 2021）。

#### ⑨圭頭大刀の位置づけ

圭頭大刀は百済に系譜を持ち、生産と流通には厩戸皇子を中心とする上宮王家がかかわっている可能性を想定している（豊島 2023）。この点で注目されるのは壬生部（乳部）の存在である。壬生部は大王（天皇）の皇子・皇女のために置かれた部で、皇子の養育料を負担したとされている。四街道市南作遺跡から、9世紀中頃の土師器杯に「山梨郷長 坏 大壬生部直岡口」と書かれた墨書土器が出土しており、律令制下の下総国千葉郡山梨郷の長として壬生部が居住していることが明らかとなった。また、藤原麻呂邸と推定される平城京左京二条大路から発掘された木簡に「左兵衛下総国埴生郡大生直野上養布十段」と書かれており、埴生郡司が大生部直氏であることが明らかとなった。『日本書紀』によると、推古天皇 15 年 2 月（607 年）に神祇を重んじる詔が出された同年に設置されたとされる。全国から出土した圭頭大刀の年代は、6世紀第Ⅳ四半期から7世紀第Ⅱ四半期までで、壬生部の設置時期に近い。これらのことから、物井 1 号墳から出土した圭頭大刀の入手には、壬生部の関与が想定される。このことは、御山遺跡の大刀にも通じるものと思われる。

※物井 1 号墳（清水遺跡 S11 号墳）出土圭頭大刀については上記の論文中では言及されていない。論文刊行後、令和 5 年 12 月 12 日に実見していただいた際に、ご教示いただいた。なお、指定理由書内における圭頭大刀の記載は、豊島氏の調査報告を引用している。

#### ⑩須恵器による位置付け

物井 1 号墳（清水遺跡 S11 号墳）を TK209（7世紀初頭）に位置づける一方で、TK43（6世紀末葉）に位置づける見解もある（荒井 2021、冨田 2021）。実際に物井 1 号墳の石棺出土の須恵器を実見した結果、TK209 を主体として、若干 TK43 が混在していることが明らかとなった。

※物井 1 号墳（清水遺跡 S11 号墳）出土の須恵器の年代決定にあたっては、千葉県教育振興財団の渡邊委員にご配慮いただき、栗田則久氏と宮内勝己氏にご教示いただいた。

#### 【まとめ】

- ・物井 1 号墳の築造は、石棺、圭頭大刀及び須恵器の様相から、7世紀初頭（7世紀第Ⅰ四半期）に位置づけられる。
- ・石棺の型式や出土須恵器の様相から 6 世紀末葉に遡る可能性も考えられる。
- ・圭頭大刀と箱式石棺の分類により、物井 1 号墳は、御山遺跡 SX-015 と同時期もしくは若干先行する可能性が考えられる。
- ・物井 1 号墳出土の圭頭大刀は、直接的か間接的か定かではないものの、大和政権との関わりを示唆する資料である。
- ・圭頭大刀は最初の埋葬時ではなく、追葬の際に副葬された可能性が高い。

参考文献

- 浅野 孝利 2023 「古墳時代の「常総の内海」水域復元に関する一試論」『埋葬施設からみた常総地域の地域構造』荒井啓汰編 5-12 筑波大学人文学部
- 荒井啓汰 2020 「常総地域の箱式石棺からみた古墳時代後期後半の埋葬行為」『考古学研究』第67巻第3号 56-75頁
- 荒井啓汰 2021 「古墳時代後半期の常総地域における埋葬方法とそのプロセス」『筑波大学先史学・考古学研究』第32号 1-22頁
- 荒井啓汰編 2023 『埋葬施設からみた常総地域の地域構造』特別研究員奨励費研究成果報告書
- 荒井啓汰 2024 『埋葬行為と社会的記憶からみた古墳時代の終焉』六一書房
- 石橋 充 1995 「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学 先史学・考古学研究』第6号 31-57
- 沼澤 豊 2009 『四街道市清水遺跡』千葉県教育振興財団
- 渡邊修一 1994 『四街道市御山遺跡（1）』千葉県文化財センター編
- 富田 樹 2021 「筑波変成岩製埋蔵施設の編年」『駿台史学』別冊第173号 駿台史学会 13-25頁
- 富田 樹 2022 「常総地域における後・終末期古墳の階層性」『考古学研究』第68巻第4号 考古学研究 72-96頁
- 豊島直博 2023 「圭頭大刀の生産と流通」『考古学雑誌』第105巻 第2号
- 沼澤 豊 2010 「中小古墳における携帯と規模の企画性」『研究連絡誌』71 （公財）千葉県教育振興財団
- 物井古墳発掘調査会 1982 『物井一号墳発掘調査報告書』千葉県四街道市教育委員会
- 渡邊修一 2003 「物井古墳群」『千葉県の歴史 資料編 考古2（弥生・古墳時代）』財団法人 千葉県史料研究財団
- 渡邊修一 1991 「群集小古墳の設計規格と規制」『四街道市内黒田遺跡群』第2分冊 331-336頁 （財）千葉県文化財センター

## 南作遺跡出土の墨書土器資料群

- (1) 名称 南作遺跡出土の墨書土器資料群
- (2) 員数 99点
- (3) 所在地 四街道市鹿渡2001-10（四街道市教育委員会）
- (4) 所有者 四街道市
- (5) 種別 有形文化財（文字資料）
- (6) 適用指定基準 奈良・平安時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- (7) 時代・年代 集落：7世紀末葉～10世紀中葉  
墨書土器：8世紀後葉～10世紀中葉

## (8) 概要

南作遺跡は、縄文時代中期に大きな集落が形成されているが、弥生時代以降から古墳時代にかけては無住の地となり、土器片すら確認されていない。奈良・平安時代の検出された遺構は、竪穴建物跡149棟、掘立柱建物跡59棟、土坑271基、粘土採掘坑2基である。当該期の集落の出現は7世紀末葉頃で、13棟の竪穴建物が確認され、集落形成当初から比較的大きな集落が出現する。この時期の注目される遺物として、畿内産土師器と鉸具と思われる馬具があげられる。当時の中央との交流や乗馬の一端を伺うことができる。8世紀後葉になると、25棟の竪穴建物が営まれ、第1のピークを迎える。その後集落規模がやや小さくなるが、9世紀後葉頃に35棟の竪穴建物が集中し、本遺跡の集落が最も隆盛する時期となる。10世紀になると集落規模が急速に減少し、10世紀中頃には集落が姿を消している。一方、南側斜面には土師器焼成用の粘土採掘坑が掘り込まれる。土師器製作に伴って作出される焼成粘土塊が集落の出現から消滅時期まで出土しており、全期間を通して土師器製作が行われていた可能性が高い。また、羽口や鉄滓の出土から、鉄器生産も行われていたようである。

墨書土器は、集落規模が大きくなる8世紀後葉から出現する。9世紀前葉には「□（山）梨文」、9世紀中葉にも「山梨」が2棟の竪穴建物に見られるが、いずれにも「六」の文字が伴う。「山梨」と「六」の文字が密接な関係を有していることが想定される。

【案】

集落の最盛期である9世紀後葉になると、唯一の多文字墨書土器である「山梨郷長 坏／大生部直罡麻」が遺跡ほぼ中央の008号竪穴建物跡から出土している。最終の10世紀前葉にも「六」を含む複数の墨書土器が確認される。土坑やピット群からも「六」8点を含む墨書土器が出土しており、全体の墨書土器の分布は遺跡南半に集中する傾向にある。9世紀代に確認される「山梨」は、平安時代中期に編纂された『和妙類聚抄』に記載されている下総国千葉郡内の7つの郷の1つである「山梨郷」を指しており、本遺跡が山梨郷内に所在することを示している。また、多文字墨書土器の「郷長」は、郡の管轄下にあつて郷の管理・運営を担った有力者で、「大生部直罡麻」という姓名を有していたこととなる。

「大生部」は部姓、「直」は東国の国司や郡司に多い姓、「罡麻」は男性名である。「大生部」の「生部」は「壬生部」と同じで「ミブ部」と読み、「大」は大きな氏族の中で最も有力な一族の美称と考えられており、東国のミブ部の中でも最も有力な氏族との指摘もある。一方、「山梨」・「六」も注目される墨書土器である。

「山梨」は馬込No.1遺跡と笹目沢I遺跡、「六」は権現堂遺跡でも出土しており、本遺跡との関係を伺うことができる。

奈良時代になって突如として大きな集落が出現する背景には、土地を開発する労働力や技術者を調達できる有力者の存在が欠かせない。多文字墨書土器や近隣の遺跡から出土する共通した墨書土器をはじめとした墨書土器群は、郡のもとで山梨郷を掌握していた大生部直一族が、南作遺跡を中心に山梨郷内の地域開発を積極的に行っていたことを示す重要な遺物となっている。

(9) 保存上の留意事項 直射日光を避け、低温・低湿度で保存することが望ましい。

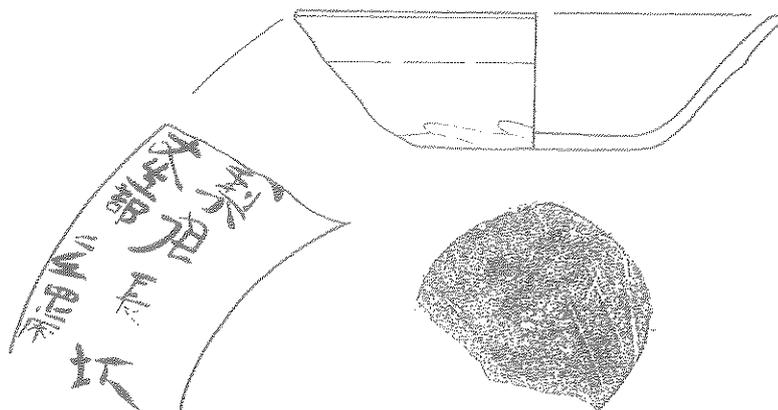
(10) 参考事項 別紙参照

(11) その他

指定理由書 (案)

【案】

別紙



S = 1/2



梨 旭 長 環  
大生部直岡 麻

「」  
「」  
大生部直岡「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」

墨書土器「山梨」



17号竖穴建物



101号竖穴建物

南作遺跡



154A・B号竖穴建物



馬込No.1遺跡



笹目沢I遺跡

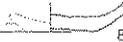
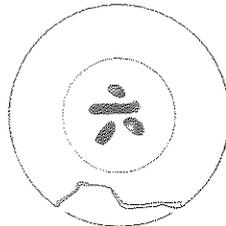
墨書土器「六」



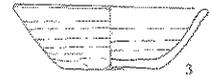
6号竖穴建物



11号竖穴建物



12号竖穴建物



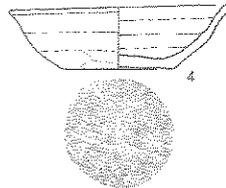
17号竖穴建物



120号竖穴建物



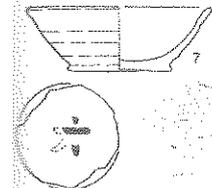
154A・B号竖穴建物



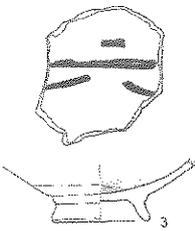
11号竖穴建物



170号竖穴建物



170号竖穴建物



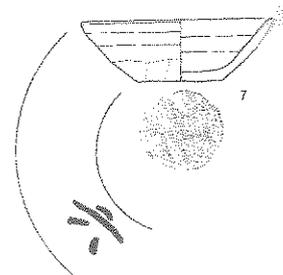
172号竖穴建物



59号土坑



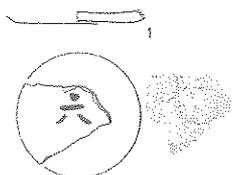
651号土坑



651号土坑

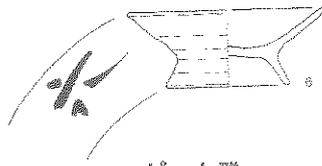


713号土坑

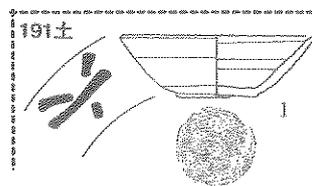


775号土坑

南作遺跡



ピット群



権現堂遺跡

参考文献

- 阿部寿彦 2002『平成13年度 四街道市内遺跡発掘調査報告書 笹目沢 No. -1 遺跡・馬込 No. -1 遺跡・高堀遺跡』四街道市教育委員会
- 大澤 孝ほか 2007『笹目沢Ⅰ遺跡・笹目沢Ⅱ遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 川尻秋生 2001「大生部直と印旛国造—古代東国史研究の一試論」『研究紀要』第7巻第1号 千葉県立中央博物館
- 栗田則久 2007「上総国・下総国における開発—印旛沼西岸・九十九里南部地域の様相—」『古代文化』第59巻第2号 (公財) 古代学協会
- 栗田則久 2018「古代山梨郷の拠点集落～成山地区南作遺跡の検討から～」『四街道の歴史』第12号 四街道市教育委員会
- 栗田則久 2020「印旛沼南岸の古代集落—下総国千葉郡山梨郷・物部郷の拠点集落—」『千葉史学』第76号 千葉歴史学会
- 高橋 誠ほか 2004『千葉県四街道市 権現堂遺跡—四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)』(財)印旛郡市文化財センター
- 高橋 誠 2007『千葉県四街道市 南作遺跡—四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(V)』(財)印旛郡市文化財センター